

2021. 10. 31 (日) マタイ27:32~38

**27:32** 兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会った。彼らはこの人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。

**27:33** ゴルゴタと呼ばれている場所、すなわち「どくろの場所」に来ると、

**27:34** 彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。

**27:35** 彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いてその衣を分けた。

**27:36** それから腰を下ろし、そこでイエスを見張っていた。

**27:37** 彼らは、「これはユダヤ人の王イエスである」と書かれた罪状書きをイエスの頭の上に掲げた。

**27:38** そのとき、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右に、一人は左に、十字架につけられていた。

#### <説教>

総督ピラトの官邸の中で「ユダヤ人の王様、万歳」とイエスを散散からかったローマ帝国の兵士たちは再びイエスの〈マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架につけるために連れ出し〉(27:31)しました。

**27:32** 兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会った。彼らはこの人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。

十字架刑に処せられる囚人は自分のはりつけになる木を自分で担いで刑場まで行かなければなりませんでしたが、イエスの体はその力もないほど弱り切っていたのでしょう。

この〈シモン〉は〈クレネ〉(今のリビアの地中海沿岸にあった町)出身のユダヤ人で、過越の祭りのためにちょうどエルサレムに来ていたのでしょう。

かつて「自分の十字架を負ってわたしに従って来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」(マタイ 10:38)、また「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」(同 16:24)とイエスは十二弟子たちにお教えになっていました。

しかしこのときその十二弟子のうちただ一人でも〈イエスの十字架を背負〉おうとイエスに従った者はいなかった、みなイエスを見捨てて逃げ、イエスを裏切りました。

そのようにして弟子たちが(他ならぬマタイ自身も)イエスに屈辱を与えたことが(イエスの方からすれば屈辱を受けた)ことがここで改めて浮彫(うきぼり)になったのです。

もちろんローマ兵たちはそんな弱った惨めなイエスを、「ぐずぐずするな! さっさと行け!」と急(せ)き立てるばかりで、「これではらちがあかない」というときに、ちょうど具合良くその場でシモンに〈出会った〉ので〈イエスの十字架を無理やり背負わせた〉だけで、イエスに対する同情からしたのではなかったでしょう。

さて、こうして刑場である〈ゴルゴタと呼ばれている場所、すなわち「どくろの場所」に来〉ました(27:33)。

**27:34** 彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。

〈苦みを混ぜたぶどう酒〉は、〈没薬を混ぜたぶどう酒〉（マルコ 15:23）とも記されていて、それはどうも痛みを和らげる麻酔のような働きがあったようです。

しかし〈イエスはそれをなめた（直訳：味わった）だけで、飲もうとはされ〉ませんでした。

それ故、もうすでにローマ兵による鞭打ちやリンチによって充分痛んでいる体にこの後十字架につけられるという痛み苦しみが更に増し加わることは間違いありませんでした。

一応は形どおりに〈苦みを混ぜたぶどう酒〉をイエスに差し出した兵士たちもそれ以上無理に飲ませようとはしませんでしたから、彼らはイエスに対して「われられの知ったことか。自分で始末することだ。」と言いつつ放ったようなものでした。

この後イエスがどれほど苦しもうと彼らの知ったことではありませんでした。

そしてこの出来事は（欄外注にあるように）詩篇 69 篇（21 節）、〈彼らは私の食べ物の代わりに毒を与え 私が渴いたときには酔を飲ませました。〉の成就でした。

この詩篇の前半〈毒を与え〉が〈苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした〉に特に対応し、後半〈酔を飲ませました〉は後の〈…酸いぶどう酒を…飲ませようとした〉（マタイ 27:48）に特に対応しています（使っているギリシャ語単語の点でも）。

詩篇 69 篇は神に信頼する詩人が、〈あなたのことで 私はそしりを受け 恥辱が私の顔をおおっているのです。私は自分の兄弟から のけ者にされ 母の子らには よそ者となりました。〉（7,8）と言って、神に信頼するが故に家族親族から裏切られ辱められている非常な苦しみを神に訴えている詩篇です。

イエスはユダヤ人を代表する祭司長・長老・律法学者たちからねたまれ、憎まれ、拒絶され、苦しめられ、辱められましたし、ついには弟子たちからさえ裏切られました。

イエスに〈食べ物の代わりに毒を与え（口語訳：食物に毒を入れ）〉、結局はイエスが味わう苦しみを増し加えたローマ兵の（その上司の総督ピラトの）冷酷さ、残酷さ故に彼らの罪、責任は問われます。

しかし彼らの裏でイエスへの最高の悪意をもって彼らをいわば操ったユダヤ人たちも当然イエスに苦痛と屈辱を与えた者たちでしたし、イエスの弟子たちでさえ裏切り者でした。

**27:35 彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いてその衣を分けた。**

ここで再びイエスは着物を脱がされその裸を人目にさらされるという、人間にとっては非常な辱めをお受けになりました。

そして〈くじを引いてその衣を分けた。〉これもまた詩篇 22:18 〈彼らは私の衣服を分け合い 私の衣をくじ引きにします。〉の成就でした（ヨハネ 19:23,24）。

**27:36 それから腰を下ろし、そこでイエスを見張っていた。**

これも詩篇 22:17b 〈彼らは目を懲らし 私を見ています。〉の成就と言えるでしょう。

なお、詩篇 22 篇も、神に信頼する詩人が、神に背き憎しみに燃える人々から虫けらのように見なされ、そしられ蔑まれる非常に大きな苦しみの中で、それでも神に信頼し、神を呼び求めている詩篇です。

〈「これはユダヤ人の王イエスである」〉と〈イエスの頭の上に掲げ〉られました。これもここではどこまでも〈罪状書き〉であり、それもまたイエスをののしり嘲る材料にしかありませんでした。

**27:38 そのとき、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右に、一人は左に、十字架につけ**

られていた。

十字架のイエスの両側にご一緒したのは、かつて「あなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に」（マタイ 20:20,21）と願った弟子たちではなく〈二人の強盗〉でした。

イエスはまるで三人組〈強盗〉の共犯者、更には主犯格のように取り扱われ、見世物とされ、このことによってもイエスに更なる辱めが加えられることになりました。

こうして〈彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられた〉（イザヤ 53:12）とのみことばも成就したのです。

このようにして十字架のイエスに対して、ユダヤ人であれローマ人であれ、全ての人が苦しみと辱めを加え、また彼らのやることなすことすべてが苦しみと辱めの手段でした。

イザヤは続けて言いました。「彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」と（53:12）

〈多くの人〉、〈背いた者たち〉とは、ほかならぬ私たち一人一人のことなのです。

その私たちのためにイエスはすべてご自分のからだとたましいに与えられた苦しみと辱めを耐え忍ばれたのです。